

『イルミナージュ・ソーダ』終わる世界と夏の夢』

特典シナリオ台本

※本シナリオはネタバレ要素を含んでおりますので、

本編を聴いてから読むことをオススメします。

※シナリオと本編内容では異なる部分がございます。

【登場人物】

水仙 サカナ（すいせん さかな）（17）

青華女子高校2年生。

少しナイーブな雰囲気を纏う少女。

成績優秀スポーツ万能と才色兼備という冠を欲しいままにしている優等生。

品のある顔立ちから育ちの良さが窺える。

教育熱心な親やステータスで近づいていく友人に少しうんざりしている。
等身大の自分を見てくれる先生に好意を抱いており、
日頃から何かとちょっかいをかけている。

普段は大人っぽく見えるサカナだが、
先生の前では年相応の少女のように笑う。

《年齢》 17歳 《身長》 154センチ

《バスト》 B 《血液型》 O型

【あらすじ】

世界が終わるまであと少し。

指で数えられる程の日常を

私はいつも通りに過ごすことにした。

とある学校の先生をしている私は

今日も朝目覚めて支度をし、学校へ向かう。

終末が迫ったこの校舎にはもう生徒は残っていない。

ただ一人、「水仙サカナ」を除いて。

私を先生以上の存在として見つめる彼女と

二人きりで過ごす最初で最後の夏休み。

世界が終わるまであと少し。

先生とサカナ、二人だけの夢が始まる。

【introduction：泡沫の蜃気楼】

・サカナの声、音の泡、ノイズの断片、加工された声などに包まれてあなたが先生になっていく導入。

リアルワールドから音声作品世界に引き込まれる。

せんせい

はじめて私をみてくれた

せんせい

私の声を聞いてくれた

せんせい

ずっとひとりだったの

せんせい、せんせい

それでも先生、

先生だけは私のことを……

せんせい、せんせい、せんせい

私と一緒にいて

先生がいれば、他に何もいらないよ

せんせい、せんせい、せんせい、せんせい、

私は、ここにいますよ

【記録音声…夏の教室】

▽教室（朝）

・夏。窓越しには明るく脳天気な水色の空。

そよ風に揺れる白いカーテン。

外から差し込む日の光で教室は照らされている。

光と影のコントラストの中、

私とサカナだけがそこに存在している。

現実感はなく蜃気楼のような世界。

・私はゆっくりと汗が滴るような時間の中で、
教卓の前に立っている。

すると、一番前の席に座っているサカナに呼ばれる。

「……先生」

「……どうしたの？
なんだか上の空」

「私のこと、わかる？」

「もー、しっかりして？
眠たいの？」

「普段通りの生活をしようって
先生が言ったんだよ？」

「うん、だから、こうして朝から学校に来て、
授業受けてるんですよ。生徒として。
偉いでしょ？」

「はいはい。」

「私が好きで先生に付き合ってるだけです」

「でも、生徒がいないと先生じゃなくなっちゃうでしょ？
私がいるから、先生は先生でいられるんだよ？」

・始業のチャイムが鳴る。

「きりーつ、きょうつけ、れい。
ちやくせき」

「ほら、先生。」

出席、とって？」

・先生、生徒の名前を呼んでいく。

しかし何も返ってこない間。（外の音だけが聞こえる）

「（呼ばれて）：はい。出席番号16番、水仙サカナです」

「朝の教室も、二人きりだと静かだね」

「……うん。」

でも、落ち着く。

うるさいの、ちょっと苦手だったし」

「話しかけてくれるのは嬉しいんだけど、
流行りものとかわからなかったから……」

「みんな恋バナばかりしてた。飽きもせず毎日。
クラスの誰が気になって、誰が誰を好きとか。

たぶん、私の気持ち話しても誰もわかってくれなかったろうな」

「……先生が好き、なんて」

「ふふ、そうだね。」

誰かを好きになるのは変なことじゃないよね」

「先生のそういうところが、よかったんだよ」

「…ん？」

詳しくはね…。

私を私としてみてくれたところ？」

「自分でいうのもなんだけど、優等生だったでしょ？
成績も生活態度もよかったし」

「親や周りの言う通りに生きてた。
でも、ずっと退屈で仕方がなかった」

「だって、そこにいるのはみんなの求める私で、本当の私じゃなかった」

・サカナ、椅子を踏み台にして机の上に立つ。

「（椅子から机に登る間の息遣い）」

「ふふふ。

一回くらい立ってみたかったの。机の上」

「はあー…：…なんか、自由…：…」

「大丈夫、大丈夫。

先生のこと、見下ろすの、はじめて。
いつも見上げてたから…」

「はいはい。

わかってる、降りるよ、降りる」

・机の上から降りるサカナ。

下手を歩いて回って、教壇に上がり先生に近づいていく。

「（喜びで思わず溢れ出した笑い）」

「ねえ、先生。」

「今、すごく楽しい」

「…ここには、先生と私しかないんだもん」

・サカナ、先生を抱きしめる

「…近い？ 近くない。ちかくないっ（笑）
ふふふ」

「…こんなに堂々とくっつけて嬉しい」

「（先生が離れようとして）…ダメ。もうちょっと」

「…うん、私、優等生なんだよ。
生徒と先生が恋愛しちゃいけないことくらいわかる」

「女と女は、別に何の問題もありませーん。
今時、好きな人の性別を気にするなんて流行らないよ」

「…誰もみてないんだから、いいでしょ？」

・サカナ、先生のことをぎゅっと抱きしめる。

「（先生の匂いを確かめるように深呼吸する）」

「私たちの関係に名前なんていらない。
先生が最後まで先生でいたいなら、
私も最後まで生徒でいいよ」

「その代わり、ずっと好きでいさせて」

・先生とサカナ、離れて

「…そろそろ授業、うん、…そうだね。
今日も一日、よろしくお願いします」

・間

「（ぼそっと）…ねえ、先生。

本当に今日で終わっちゃうんだね、世界」

・収束していくノイズ。

「ぱしゃん」と音がして

ここから世界が加速していく。

【記録音声…プール・サイド・バブル】

▽プールサイド（昼前）

・教室を飛び出してプールに向かった先生とサカナ。
プールサイドに並んで座っている。

プールは半分外・半分室内のような絵画的空間。

プールの水は、気泡が浮かびソーダ水のようなようである。

・サカナ、先生を誘うように水面を足で弾いている。
暑いのか、制服をパタパタさせる。

「（水の中に足をいれて）はああ……。あー、涼しい！」

「先生も足、入れなよ。
プールの中、気持ちいいよ？」

「え、ストッキング履いてるの？
こんなに暑いのに？ 真面目だなあ」

「脱いじゃお、今！
ねえ、ほら。
自分で脱がないなら、私が脱がせてあげよっか？」

・先生、ストッキングを自分で脱ぐ。

「おお……。セクシー……。大人の色気、でてる」

・サカナ、足で優しく水面を撫でる。
サカナに導かれるように、先生も足を水の中に入れていく。

「ふふふっ、

思ったよりつめたかった？」

「でも気持ちいいでしょ？」

「こういうの、なんて言うんだろ。
足湯ならぬ、足水？」

・サカナ、近くあった炭酸を手にする。

「はい、先生の分」

・サカナ、炭酸を先生に渡す。

二人、それぞれ蓋をあける。サカナの炭酸だけふきこぼれる。
サカナにとって都合のいい世界が広がる。

「わっ、わっ、わー！

（吹きこぼれて終わって）あー……。
制服、濡れちゃった……」

「えー、いやらしい目を見た罰？」

「神様って、そんなことでお仕置きするの？」

「別にいいよ、濡れても。」

「どうせ脱ぐつもりだったし」

・サカナ、プールから出てリボンを取り、制服を脱ごうとする。

「ん？ なに？ そんなに慌てて。」

「……うん、だから、脱ごうとしてるんだけど？」

「あ、先生。」

「それ、いやらしい目だよ？
神様に叱られちゃうよ？」

・サカナ、制服を脱ぐ。

「ふふふ、そんなに顔背けなくてもいいのに」

「（いたずらっぽく）……どう？ 私の身体。ねえ、こっちみて？」

「（ちょっと間があって）……ざんねん、水着でした。下にずっと着てたの。ドキドキした？」

「あーあ。（その様子をみて笑って）……ふふふ。……ううん、なんでもない。……先生って、やっぱり真面目っ」

・サカナ、プールに飛び込む！

「（息継ぎして）ぷはあっ！ はあ……」

・サカナ、先生のところまで軽く泳いでくる。

「ねえ、先生もきて！一緒に泳ご！」

「水着なんてなくてもいいから！そのまま入っちゃえばいいの！」

「今日だけ！今日だけだから！きーて」

「もーう。……だったら……。私も水着きない！脱ぐ！」

・サカナ、水着を脱いで放り投げる。（水の中で脱ぐ）

「（勢いと恥ずかしさで）はあー！ やっちゃった！
先生、これで言い訳できないよ！」

「水着着て欲しかったら、飛び込んできて？
はい！ さん、にー、いち！」

「（入らない様子をみて煽るように）いち！ いーち！」

・先生、プールに入ってくる！

「入ったー！ ふふふつ、はははっ！」

「（笑いが止まらない）ほーら。服重いでしょ？
脱いで脱いで！」

・サカナ、先生を脱がしていく。

「……ボタン、取りづらい。……とれた！」

・先生、裸になる。

「はい、ぜんぶ脱げましたーっ」

「（呼吸を落ち着けて）はー……。楽しい。
二人して裸でプールなんて。映画みたい」

「…うん、大変なことになってる。
……ちょっと、冷静にならないで。
はずかしくなるでしょ」

・サカナ、先生に近づいていく。

「あ、くっついたら、そんなに……かも。
いや、そんなことない……ね……」

「（ふざけた感じで）え、ほんとだったら謹慎処分？
裸になったから？」

「まあ、そうかも。」

でも、生徒の非行を見て見ぬふりして、
挙げ句の果てに自分も裸になった先生は……。
教員免許没収だね」

・ 水の中に沈んでいく二人。

「ふふふっ。」

あーあ、せっかく優等生で生きてきたのに。
さいあく」

「先生もさいあく？
そっかー。ふふっ」

「なーんにもなくなっちゃったね、私たち」

「（つぶやく）……でも……しあわせ」

・ 水の中に沈んで溶け合っていく。

【記録音声…シースルーメモリア fragments clear room】

▽学校の廊下（？）

・ 幻想的な世界に引き込まれてしまった先生。

たくさんの風鈴が壁に敷き詰められた遠くて広い空間を
サカナと二人で歩いている。

どこかノスタルジックな空気が流れる。

「（体を伸ばして）んゝゝゝ……。」

（解除して）ふう……。」

「うん、泳ぐの気持ちよかったねえ。
さっぱりした」

・ サカナ、先生の後ろに立って。

「あ、先生、ちょっとストップ。
そのまま……。」

・ サカナ、走ってきて急に先生の背中に抱きつく。

「えいっ！ ふふふっ！ びっくりした？」

「ねえ、おんぶして、おんぶー」

・ 先生、サカナをおんぶする。

「ふふふっ。

さあ、すすめー」

・ 先生、サカナをおぶって歩く。

「先生、泳ぐのうまいよね？ 意外と。教室とか通ってた？」

「（笑いながら）どっち？」

私は通ってたよ。小学生の時。平泳ぎ覚えるくらいでやめちゃったけど」

「塾が忙しくなって…。

お母さんがもう十分でしょって」

「続けたかったな。ほんとはね。

泳ぐの好きだったの。

泳いでいる間は何も考えなくて済むから」

・ここでおんぶを解除する。

「（背中から降りて）よいしょっ」

「んー、厳しかったのかな？

人よりは勉強する時間が長かったけど」

「親もいっぱい勉強したみたいだから子供にも同じ道を歩ませたかったんじゃない？」

「その時は何の疑問もなかったよ。

だって、それしか世界がなかった。

…先生に会うまではね」

・いくつもの風鈴の響きが重なって広がっていく。

「…ん？ どうしたの？
なにか気になる？」

「聞こえる？ 何が？
私にはわからないけど…」

「また、ぼーっとしてるの？
朝からそうだよね…？」

「（ふざけて）おーい、大丈夫ですかー？
ここがどこかわかりますかー？」

「…：うん、そう。
何度も先生が歩いた廊下。せいかい」

「よかったー。
先生、おかしくなっちゃったのかと思った」

「おかしくなった人と世界に二人きりなんて嫌だよ、私。
（反応受けて）ふふふ、眠くなっちゃだめだよー。
ちゃんと起きててね」

「ねえ、教室に戻るまで競争しよっか。
走ったら、目、覚めるでしょ？」

「（考えて）じゃあねえー…：勝ったら…：。
…え？ 何言ってるの、先生。
廊下は走ってもいいの。
もうぶつかる人いないんだから」

「（思いついて）じゃあ、先についたら…：
なんでも一つお願い事できるってどう？」

「のーのー、異論は認めません。
よーい、スタート！」

・二人は走り始める。

前の方でサカナの走りながら呼吸が聞こえてくる。
音楽的表現になる。

「（走っている息づかい）」

・サカナ、階段にさしかかったところでいったん止まり…

「おそいー！」

私、勝っちゃうよー！」

・先生、サカナの近くまで追いつく。

「はやくはやく！」

・サカナ、そこから階段に登り始める。

「（階段を上る息づかい）」

「（階段の途中で止まって息を整えて）はあはあ……。

先生、追いつく気ないでしょ？

さっきから全然距離縮まってない」

「私の勝ちってことにしちゃうけど……。

それでいい？」

「わかった。沈黙はイエス、ってことにするね」

・サカナ、真剣になって

「なら、お願い事……。

私が、サカナが、ここにいてずっと覚えていてね」

「この世界が終わっても。

先生の頭に私が残っていたら、また会える気がするから」

「……約束だよ」

・静けさを引き立たせるための風鈴が揺れる。

「……きて、こっち」

「……歩いてきて、前に」

・先生は、そこに立ち尽くす。

「ふう……。

私がいないと何も出来ないんだから、先生は」

・サカナ、先生の元にやってきて

「教室、もどろ？」

・先生、まぶたが閉じる

カットアウト。一瞬で終わる。

【記録音声…レイニーガール・レクイエム】

▽保健室（？）

・雨が降っている。

広い空間の真ん中ぽつんとベッドがある。

先生はそのベッドで寝ている。

大きな何かが回転している音がかすかに聞こえ、
ベッドの近くには、

炭酸水とミュージックボックスのようなものが置いてある。

サカナは傍に座って先生の様子を見守っている。

先生、ゆっくり目を覚まして

「……おはよう、先生。
気分はどう？」

「あんまりにも眠そうだったから、
保健室連れてきちゃった。
教卓で寝るよりマシでしょ？」

「大丈夫、そんなに時間経ってないよ。
ほんの一瞬」

・サカナ、炭酸をコップに注いで

「どうぞ」（目覚ましに）

・渡されて先生、それを飲む。

サカナも自分のコップに炭酸を注ぐ。

サカナ、先生の近くに座る。（ベッドに座ったテイです）

「炭酸って、不思議な飲み物だね。
他にないじゃない？ こんなシュワシュワの液体」

「（反応して）ね、最初に飲もうとした人の勇氣すごい」

「ほっとくとすぐ抜けちゃって。

花より短い命だね…。

そういうと、夢いものを摂取してる気分になる」

「（炭酸を飲んで息を吐く）ふうー……」

・間。

「炭酸、高校生になるまで飲んだことなかった」

「ほんと。

うちではダメって言われてたから、
中学までは律儀に守ってて……。

で、高校でこっそりデビュー」

「みんながやってること私はできなかった。
その代わり、優等生にはなれたけど」

・サカナ、立ち上がって、ベッドの近くにある、
ミュージックボックスのようなものを起動させ、
花が練り込められた透明なレコードをかける。

（音楽と共に、ぷちぷちというノイズや
ここではないどこかから聴こえる遠い風のような響きなどが、
水の底にいるように包み込む）

「優等生になって、
先生の目に止まったのは、よかったかなあ」

・サカナ、ベッドの中に入っていく。

「……なに？ ダメ？」

なんか寒くなってきたって」

「（呟いて）……うそ。」

ふふふ、先生が寝てたから、あったかい」

・サカナ、先生の隣に寝る。

「先生って……近くでみると……。」

（思わせぶりして）やっぱり美人」

「学生時代モテたでしょ？」

というか、今もモテてるでしょ？

ねえー、隠さないで答えなさい」

「……あ、何も言わないつもりだよ？」

じゃあ私も……。 （小さく）何も喋らない」

「……………」 （ちょっとした沈黙）

「（聞こえないくらい小さな声で）やっぱりだめか」

「んー……。 もうー………」

「……（ため息）はあ。」

敵わないなあ」

「でも先生。」

私、先生のこともっと知りたいと思ってるよ」

「好きな食べ物とか、趣味とか

休みの日の過ごし方とか」

「……何も知らない。

私たち学校でしか会わないもん」

「確かなのは、こうして目の前にいることくらい。

それでも、十分なんだけど。

……欲張りかな」

・ミュージックボックスが止まって

「（つぶやくように）あ、……止まっちゃった」

「先生……。

先生は怖くない？

……終わりが来ること」

「私は……どうかな。

嬉しい気もするし、寂しい気もする」

「ただ、わかってるの。

ハッピーエンドは、

終わりが来ないと迎えられないってこと」

・間。

「……ねえ」

「………キス、して」

「……キスして、欲しい」

「……だめ？」

「だって最後なんだよ。」

最後だから……。

私、いい子にしてきたよ。

みんなに求められることいっぱいしてきた」

「このまま終わっちゃったら、私きつと後悔する」

「……最後のわがまま。」

お願い、先生。

私に恋を教えて」

・サカナ、先生にキスをする。

「（つぶやく）……唇ってこんなに柔らかいんだね。
すごく、優しい気持ちになる」

「（様子を伺って）……先生？」

・先生、サカナを抱きしめる。

「うん……うん……。」

（こみ上げてくる）……ううん、嬉しいよ。嬉しい……。
先生、先生……」

・サカナ、先生にキスをする。

「……好き。大好き。」

ずっと、ずっと、好きだった。

毎日、夢をみてたの。夢だった。

先生と……」

「ありがとう。」

……私、世界でいちばん幸せな女の子だよ」

・深い夢の世界で落ちていく。

肺の中にまで水が満ちていくように。

【記録音声…果てという名の恋】

▽屋上（？）

・屋上のような場所で夜の空を見上げている二人。

「（ささやくように）…先生。せんせい。
なんでもない。呼んでみただけ」

「私の名前も呼んで？
あ、下の方ね。サカナって言って？」

「ふふふ、なんか照れちゃうね。
先生は、好きな人は下の名前で呼ぶタイプ？」

「…そうなんだ。
私は呼んで貰いたいタイプ。
…うん、さっき、そうだった」

「…ね。もう暗い。
空、真っ暗」

「すごいよね。朝も夜も、
私たちの意思とは関係なく巡るの」

「陽が落ちないでと願っても叶わないし、
夜が明けないでと願っても叶わないし」

「…人生って、思い通りにいかないことばかり」

「…もちろん。全部じゃない。
私、この世界が好きだよ。
先生がいるから」

「むしろ、この世界は私の思い通りになってるみたい。
……なんて言ったら、私、悪い子かな」

「……もしもの話、しよっか。
うん、もしも、ね」

「……もしも、
この世界が終わらなかったとしたら。
また明日が来るとしたら、
先生はどうしたい？」

「やっぱり、今日みたいに、
いつも通りに先生でいたい？」

「……うん。……うん。
先生が学校にくるなら、私も」

「……その時は、私に会いたいと思う？」

「……。
うん、信じてる」

・間。

「……。ねえ、今、何みてる？」

「空ってこんなに広がったんだね」

「手、握っててもいい？」

・間。

「……あ」

「蓋、開けっ放し。
さっき飲んだ炭酸」

「ちょっと思い出して。
まだ残ってたのに」

「ね、もったいないことしちゃった」

「……ほんと、もったいない。
でも、いいよね」

「……これでいい」

「……先生、おやすみ」

・ 音声が終わわり、世界が終わる。

【記録音声：Dream of fish / world - s end soda】

▽????

・しばらくホワイトノイズもない無音が流れる。

この世界はあなたが聴き終わることと終わる。

しかしこのトラックをあなたが聴いているということは、
まだ世界は終わっていない。

サカナ、あなたの存在に気づいて目を覚めます。

「……ん、あれ……」

「……先生？」

「……私の声が、聞こえてる？」

「世界は、終わったのに……」

「どうして……」

「……」

「先生とまた会えたのは嬉しい」

「でも……」

「ねえ、先生。

先生は今、どんな気持ち？」

「世界が終わって欲しくなかった？」

「まだ私と一緒にいたい？」

「……そうしたらハッピーエンドにはならないよ」

「前に言ったでしょ。」

終わるからハッピーエンドを迎えられるの」

「いい終わりだったじゃない。」

二人で、くっついて。空を見上げて。

すごく幸せだった」

「先生も同じ気持ちじゃなかったの？」

「そっか。」

……先生は、その終わりを否定したいんだね」

「……それは、私を傷つけることになっても？」

「……うん、これはね、夢だよ。私の夢」

「私、今までずっと生きながら死んだの。」

親も友達も、みんな上部の私しかみない。

本当の私なんて誰も興味がない。

唯一、私と向き合ってくれたのは先生。

でも先生は、先生だから。

私と一緒にいる未来なんてないの。

だってそうじゃない？

先生は誰かのものじゃないから。

みんなの先生だから。

私のこと、生徒の内の一人、
としか見てくれなかったでしょ？」

「……ふふ、いいの。
それが普通」

「だから、このまま何も変わらない毎日が続くなら、
そんな世界、終わっちゃえばいいのになって思った」

「終わってくれたら、
この息苦しさから解放されるのになって」

「そしたら、願いが叶った」

「終わる世界で
先生と二人きりになったの」

「……これまでの世界は、私の夢なの。
私の願った、世界が終わる世界……」

「……ごめんね、突然言われても困るよね。
だけど、わかって欲しかったから。
私の気持ち」

「信じられない？」

「じゃあ、私に近づいてみて？
何かお話しして？」

「……」

「……せんせい？」

「ふふふっ、ごめんね、いじわるしちゃった」

「私、知ってたよ。」

「先生が動けないこと、喋れないこと……」

「仕方ないよね。」

……ここは、夢の中だから。

先生は何もできなかった。

お互いの姿もみえなかった。

私の声を聞くだけしかなかった」

「そんな私たちが一緒に時間を過ごせたなんて奇跡みたいだね」

・耳に炭酸の音が流し込まれる。

「私たちが一緒にいられるのは夢の中だけ。

なら夢は、夢のままにしておこうよ」

「私たちの物語はハッピーエンドで終わるの。

だから、ここでおしまい」

「先生。……さよなら」

・炭酸の音が強くなる。

その後ろで声が聞こえる。（だが炭酸の音が大きく聞こえづらい）

「もし先生が、

本当に私と向き合ってくれるなら……」

「（呟く）………私を、見つけて」

・炭酸の音が収束していく。

【あたりトラック】

・無題のトラックが6つある。

基本的にはノイズだけのトラック。

その中で1つだけ彼女の声が入っているトラックが存在する。

「……先生？」

「そこにいるの……？」

「……探してくれたんだ」

「……本当はね、私も同じ気持ちだった。
終わりがたくなてなかった」

「明日も先生と一緒にいたかった。
先生と結ばれたこと、夢になんかしたくなかった」

「……もう、何も言わなくていいよ。
先生の気持ち、伝わったから」

「……先生、私のこと、見つけにきてくれてありがとう」

「……救ってくれてありがとう」

「……お礼に、キスしてあげる。
私がしたいんだけど」

「……あ、そうか。
お互い姿が見えないのにどうやって？
って、思うよね」

「……大丈夫。目を閉じて。
私の姿を想像して。

……好きって気持ち込めてね？」

「私も、先生の姿を想像するから。
先生のこと想うから」

「……できた？」

「うん。先生。……大好き」

・サカナ、先生にキスをする。

「……これはね、おまじない。

世界が終わっても……。

ううん、世界が、私たちの時間が、
終わらないようにするおまじない」

「これからもずっと一緒だよ、先生」

【introduction：差分テキスト「甘い呪文」】

・Introductionを作る際の際の差分パーツとしてのセリフ
先生をこの世界に引き摺り込むために、
学校で過ごした甘い思い出をサカナは口にする。

「おはよう、先生」

「ねえ、何してるの？ ねえ」

「質問あるんだけどいい…？」

「突然テスト出すのやめてー、まあできたけど」

「ご飯一緒に食べたい…」

「先生の授業わかりやすくて、好き」

「ちょっと聞いて！この前ね…」

「いいでしょ？ いいよね？」

「友達いるけど、いないから」

「最近は学校、楽しいの。ちょっとだけでも楽しいから、寂しいの。どうしてかわかる？」

「…誰かさんのせい」

「…嬉しい。

そんなこと言ってくれた人、はじめて」

「先生が、はじめてだよ」

「このまま終わってもいいな…」

「誰にも邪魔さなれないで。
二人きりになれたら…。
それだけで、いいのに」

※※※※※※※※※※※※※※※※

「あゝゝ……」

「もしもし？」

「風………」

「…暑い………」

【記録音声…シースルーメモリア 差分テキスト「サカナの過去」】

・いくつもの風鈴の響きが重なって広がっていく。
という箇所、サカナの声を滲ませるためのテキスト。

「（寂しくて泣く）」

「（ぼそっと）…ほんとは嫌だった…」

「（ぼそっと）嫌だった…ほんとは」

・記録音声…シースルーメモリアの際、
走り出すシーンで、
過去のサカナの声が流れ出すという演出で使う
差分パーツの収録となります。

「私が我慢すれば、すべてうまくいくから」

「みんなが望む私が一番生きやすいはずなのに」

「ずっと空気が薄くて、息がしづらい」

「助けてって言えたらよかった」

「どうしても言えないの？ どうして……」

「私、全然いい子なんかじゃない」

「ほんとうの私はどこ…？」

「……ごまかしに慣れて、忘れていくのが怖い」

「私、何がしたいの…？ 何をしているの？」

「……こんなことしたって。こんなこと…」

「でも…：それでも…：…」

※※※※※※※※※※※※※※※※

「あ—————っ ていうのが、好き』

「（声にならない）あ—————！—————」

「（鼻息だけで苦しそうに呼吸する音）」

「やめた…：…：…」

「声が出てこない」

「喉が…：かわいた…：」

「怒られないようにちゃんとしなきゃ…：」

「寂しい…：」